

特別展示「すなどりの具～西宮の漁具～」

西尾嘉美（当館学芸員）

はじめに

西宮市立郷土資料館では、イカ釣針やタコツボ、カニカゴ、モンドリなど、漁業に使われていた道具＝漁具を千点近く所蔵している。これらの大半は、西宮で漁業をしていた方よりの寄贈資料であるが、西宮における漁業そのものは昭和40年代半ばで途絶えた。

第35回特別展示では、西宮の漁業の盛衰を紹介すると共に、その終わりを見つめた「最後の漁師」たちが使った漁具類を展示する。

1. 西宮の漁業の盛衰

鯛に鯛に白魚…こうした魚は、かつては西宮の特産物だった。江戸時代の名所や産物を紹介した地誌『摂津名所図会』や『日本山海名産図会』に、西宮の特産として取り上げられている。なかでも鯛は「至って美味なりと人のかたりき」と賞賛されている。

西宮の漁業の萌芽は、中世に廣田神社へ奉仕する人々が中心となって

漁業を営んでいたことにあるとされる。中世末から近世初頭にかけて、西宮をふくむ大阪湾沿岸は地引き網や敷網を使った鯛漁の先進地となった。

一方、江戸開府以降、関東地方では流入する人口に対して種々の供給が追いつかず、特に鮮魚を安定供給できるほど漁業は成長していなかった。そこに、先進技術を持つ関西の漁師たちが進出して行った。

関西の漁民が行っていた共同で大量に鯛をとる漁法が房総半島に持ち込まれたのは、元和・寛永年間（1615～44）という。その漁法を見た関東の漁民は大いに



写真1 『摂津名所図会』巻7

驚いた。慶長・元和期（1596～1624）の風俗を記した『慶長見聞集』の「東海にて魚貝取り尽くす事」には、大きく広げた網の中に入った「大魚小魚、一つも外へ漏るる事なし。海底の鱗屑までも悉く引き上げる（中略）天地開闢より、関東に見も聞きもせぬ、海底の大魚、砂底の貝も取り上ぐる」と記されている。船2～4艘が一組となり、漁師20～40人が、長さ300間（約540m）にもなる大きな袋状の網を引き、鯛の群れを囲い込み、海岸へと引き寄せていく漁法は、まさに鯛の大群が一網打尽になる様子から「地獄網」と呼ばれた。

その後、九十九里浜では沿岸50余りの村々で地引き網が行われ、「日本第一の漁業」と称され、全国最大の鯛漁ならびに干鯛の生産地になった。

千葉県鴨川市天津の市指定有形民俗文化財善覚寺近世文書「先祖六右衛門より申し伝える事」（善覚寺所蔵）には、西宮出身の四位六右衛門が、房総の同郷者を頼って江戸から移り住み、商いに励んだ様子や、祭礼の際に「西宮干鯛仲間」と書いた幟が立てられた様子などが記されている。

江戸時代以降も、御前浜から鳴尾の浜にかけて鯛漁をはじめとした漁業が盛んであったが、第二次世界大戦時には、軍事作戦上という名目で操業に制限が加えられた上に、中心的な世代が出征したこともあり、危機に陥った。

終戦後、働き手たちが戻ってきたが、沿岸の漁場は沈んだ船などの残骸により荒れてしまっていた。そこで、大規模な清掃や港湾施設の復旧作業が行われ、ようやく昭和25・6年ごろから漁獲高が回復する。

また、櫓で漕いだり、帆で風を受けたりしていた船に焼玉エンジンが広く搭載されるようになった。焼玉エンジンとは、鋼鉄製の球状の燃焼室を持ち、この部分をバーナーで熱することで始動し、駆動している間は焼玉を加熱する必要のない簡便な構造のエンジンである。その駆動中にリズムカルな爆音を立てることから、「ポンポン船」という愛称で親しまれた。昭和30年代中ごろからは、ディーゼルエンジンが普及し、漁場も広がっていった。

昭和23年に「水産業協同組合法」が成立して、各地で漁業協同組合が設立され、西宮市域では西宮・鳴尾（のちに西と東に分離）の組合が設立され、200人を超える漁師が所属していた。

しかし、年によって漁獲高の変動が激しく、昭和38年の大寒波では海水温が異常に低くなり、漁業は大打撃を受けた。特に、タコが全滅したといわれた。

高度経済成長期に入ると、生活排水・工場廃水の浄化設備が追い付かず、赤潮の発生など海の汚れが問題となる。魚は油臭く、カタクチイワシを加工しても色が悪く、品質を保てなかったという。湾岸の埋め立てなどの大規模開発に伴い徐々に漁場が狭められ、昭和40年代に入ると尼崎市から神戸市東部にかけての6つの漁業協同組合は漁業権放棄を受け入れた。ついに昭和45年、一部の特別許可を得た漁師をのぞき、西宮の漁業は終わりを迎えた。

2. 「すなどりの具」の諸相

「すなどり」は、「漁り」と書き、魚や貝をとる、漁をすることを意味する。

当館では淡水漁業を含めてさまざまな漁具を所蔵しているが、その中から、イワシ・イカ・タコに関わる漁具を紹介する。

① イワシ

西宮の代表的な「すなどり」といえば、イワシ漁であろう。イワシ漁では、引き網を主に使った。船3艘ほどが、指揮役・網引き役に分かれ、40人近い漁師が乗り込み、袋状の網を海に投げ入れ、魚群を取り囲むように巻き込んでいき、浜に引き寄せる。岸では、手伝いの人々も加わり、網の綱を引いた。一緒に網に入った小魚などをもらえるので、それを目当てに子供たちも手伝ったという。

イワシは「よわし」と呼ばれるほど、すぐに弱ってしまう魚であるため、水揚げ後、すぐに加工場へ運ばれる。加工場でさっとゆでて、浜辺に並べて干す。この干しがあがったものが煮干しである。干している間に雨にあたると色が悪くなる。また、鮮度が悪いと腹が割けたり身が反り返ったりして品質が落ちる。そうしたものは肥料になった。

光沢があり、お辞儀をするように少し曲がったものが良質とされ、西宮神社にあやかり「宮じゃこ」と称された。特に、秋口のものの品質が良かったという。



写真2 昭和28年撮影の御前浜

右の人々は、干し上がった宮じゃこを紙袋に入れて、出荷の準備をしているところ。左手前はセイロに入れた宮じゃこ。左奥は網干し。

② イカ

イカは釣針を使った。竹製の軸に針を2～4本付け、軸に餌を付けて、食いついたイカを引っかけるようにして釣りあげる。餌は臭いの強いものが良く、ウルメイワシの半乾きなども使った。現在では、針を放射状に取り付け、効率よくイカを引っかけるように改良されている。

イカは、日によって泳いでいる深さが異なるため、5尋（約7.5m）、7尋（約10.5m）などの2～3種類の長さの仕掛けを落として、イカが泳いでいそうな深さを探った。

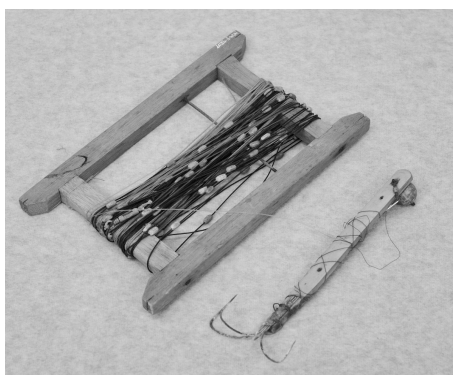


写真3 イカ釣りの仕掛け

③ タコ

タコの最盛期は5月から9月である。特に麦の収穫期に当たる7月ごろのタコは「麦わらタコ」と呼ぶ。また、7月はじめの半夏生の日に、タコを食べるという習慣があった。旧瓦木村の岡本家に残る史料にも、半夏生の日にタコの贈答があったと記されている。

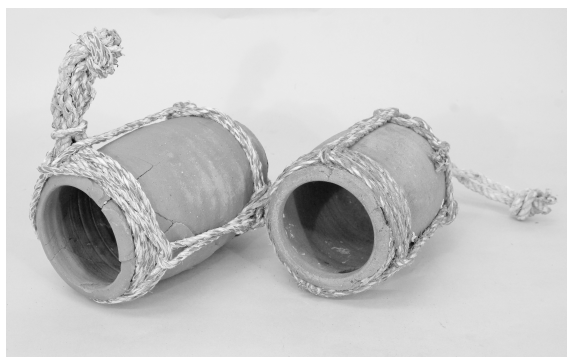


写真4 タコツボ

タコをとる方法には、釣り、網漁、ツボ漁がある。タコをとると聞けば、まず最初に思い起こすのはタ

明石市江井ヶ島で作られ、使われていた。

コツボを使ったツボ漁であろう。口の大きさが直径12～14cm、高さが30cmほどの素焼きのツボを海中に沈めて、その中に潜んだタコをツボごと引きあげる。1筋の幹縄に80～150個ほどのツボを結びつけてある。

漁師によると、ツボの中ではタコが安心してから、おとなしく引きあげられてくるという。釣りや網では、タコが暴れるので傷がついてしまうことが多いが、タコツボ漁では傷が付かないので高値で市場に出せるとのことである。

明石はタコ漁で有名であるが、かつてはタコツボの生産地でもあった。明石市江井ヶ島・中八木などでは良質の粘土を産出したので、多くの窯元があったが、昭和38年の大寒波によるタコの激減で操業者が減り、窯元も廃業していった。最後の窯元は、平成7年の阪神・淡路大震災で窯が被災し、再建できず廃業した。

最盛期には、西宮から明石の窯元へ注文していたといい、淡路島からも買い付けに来ていたという。現在ではタコツボを使う漁師も減少し、素材もプラスチック製に変わったが、明石の特産としてタコツボ漁は続けられている。

3. 道具を作る、整える。

効率よく、かつ、コンスタントに魚をとるには、道具の改良、日常的なメンテナンスが欠かせない。たとえば、浜辺に網を干す風景は、漁村の定番である。

網は、海底に引っかかったり、かかった魚をはずす際に網目が切れたりすることが度々あった。網を繕うには、竹製の針＝アバリ・タケバリを使った。網目の大きさに合わせて、幅が1cmに満たないものから、幅3cm余りで長さが40cmを超えるものまで、漁師1人で大小さまざまなサイズの針を使い分けた。

網の素材は、古くは稲わらを使っていた。目の細かい網には麻・木綿を使い、擦れや腐り防止のために、頻繁に柿渋に浸けていたという。

第35回特別展示「すなどりの具～西宮の漁具～」

開催期間：令和元年（2019年）7月20日（土）～9月1日（日）

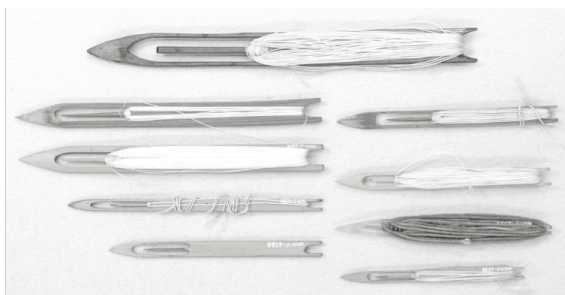


写真5 アバリ

大小さまざまな大きさのアバリがあり、絹糸・綿糸などが巻き付けられている。

トピックス

上田順男旧蔵漁具資料

浜町で漁業をしていた上田順男（としお）氏（大正5年～平成3年）が使っていた漁具が800点余り寄贈されている。

順男氏は、第二次世界戦後に漁師になった。1人で船を操りながら漁をし、西宮の漁業が終わった昭和45年まで操業していた。その後は、たまに釣りをするぐらいだったが、亡くなるまで船を手放さず、釣り客を運ぶ渡船を手伝ったり、海洋調査に協力したりしていた。順男氏の死後、漁具小屋を取り壊すため、残されていた漁具がまとめて寄贈された。

順男氏の使っていた漁具には、イカ釣針・タコツボ・モンドリ・カニカゴ・延縄（はえなわ）などが含まれている。タコツボには「打文」と鮮やかに墨書されているが、当時「打文丸」という船に乗っていたため、他の漁師のものと間違えないように書いていたようである。どの漁具も、昭和20年代以降に使われていたものであるが、1人の漁師が使っていた漁具の大半がそろっており、貴重な資料群である。



写真6 打文丸

浮き輪には「にしのみやうえだ」と記されている。

発掘された「すなどりの具」 —西宮神社社頭遺跡出土の土錘について—

瀬尾晶太（当館学芸員）

はじめに

西宮神社社頭遺跡は、鎌倉・室町時代（以下、中世）に形成された、西宮神社を中心とした「町」の遺跡である（図1）。

本稿では、中世の西宮町で行われた漁業について、西宮市教育委員会が平成30（2018）年に実施した西宮神社社頭遺跡（本町60番）の発掘調査で出土した漁業で用いる網の錘である「土錘」から迫ってみたいと思う。



図1 西宮神社社頭遺跡位置図（合田2009に加筆）

1. 西宮神社社頭遺跡出土の土錘について

本調査地では、合計26点の土錘が出土している（写真1）。遺構に伴うものは少なく、ほとんどが中世の遺物包含層から出土したものである。

出土土錘は、長軸方向に対して貫通する孔をもち、管状土錘とよばれる種類であり、安岡分類（安岡2018）のA類に該当する。本稿では、便宜的にA類を細分し、円筒形のものをA-1類、胴部が膨らむ中太のものをA-2類、A-1・2類に対して細く小型のものをA-3類、



写真1 西宮神社社頭遺跡（本町60番）出土の土錘（一部）左からA-1類、A-2類、A-3類

球形のものをA-4類と呼称する(図2)。その内訳は、A-1類が12点、A-2類が12点、A-3類が2点であり、A-4類は確認されていない。また、土師質、須恵質の二者があり、A-1・3類は土師質が多く、それとは対称的にA-2類は須恵質が多い傾向がみられる。

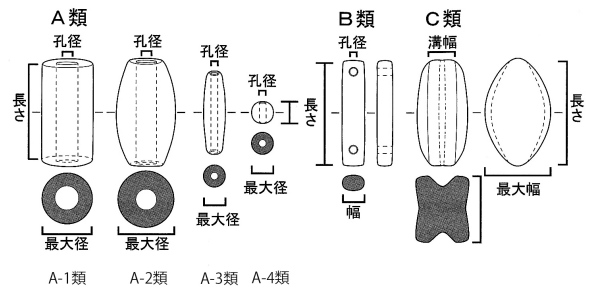


図2 土鍾の分類模式図(安岡2018に加筆)

2. 出土土鍾からみる中世の西宮町の漁業

土鍾は網に装着して使用するため、「孔径」は本来装着されていた網の太さ(規模)を推定するヒントになる。孔径から網の種類や漁法について考えてみよう。

孔径を計測できた土鍾は16点あり、グラフ(図3)のとおり、4パターンに分けられる。

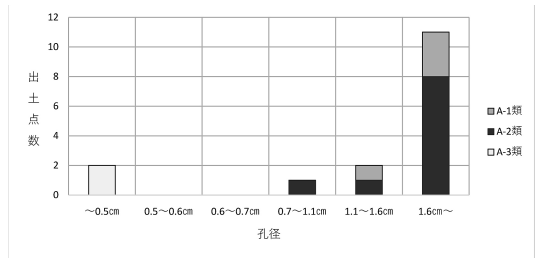


図3 出土土鍾の孔径

- ①孔径0.5cm以下(2点): 重量10g前後。A-3類のみ。
- ②孔径0.7~1.1cm(1点): 重量66g。A-2類のみ。
- ③孔径1.1~1.6cm(2点): 重量40g前後。A-1・2類。
- ④孔径1.6cm以上(11点): 重量50~80g前後。A-1・2類。

例外的に重い②があるものの、基本的に孔径の大きさと重量は比例する。

次に、土鍾の孔径の大きさと漁網の種類に関する研究(真鍋2014)を参考に用途の違いについて考えてみたい。この研究は、明治時代以降の土鍾を使用した漁網を分析し、網の種類と、そこに使われる土鍾の孔径を数値化し、指標を示している(表1)。明治時代以降の資料の分析結果を中世の実態として考えることに慎重になる必要はあるが、土

表1 土鍾の「孔径」と漁網の関係(真鍋2014)

全国の土鍾が装着された漁網の沈子網の径 ()内は土鍾以外の沈子を装着した事例						
漁網の種類	径 尺 1分=0.303cm					
	0.5cm以下	0.5~0.6cm以下	0.6~0.7cm以下	0.7~1.1cm以下	1.1~1.6cm以下	1.6cmより大
土鍾の孔径	0.5cm以下	0.5~0.6cm以下	0.6~0.7cm以下	0.7~1.1cm以下	1.1~1.6cm以下	1.6cmより大
沈子網の径	0.4cm以下	0.4~0.48cm以下	0.48~0.56cm以下	0.56~0.88cm以下	0.88~1.28cm以下	1.28cmより大
刺網	306 (19)	51 (8)	21 (7)	43 (16)	6 (21)	1 (7)
掩網	0 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
タテキリ網	2 (2)	4 (0)	4 (1)	1 (1)	1 (3)	2 (1)
地曳網	0 (3)	1 (0)	1 (0)	1 (8)	18 (20)	31 (45)
垣網	0 (0)	1 (2)	0 (0)	0 (1)	0 (2)	0 (1)
網ウケ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)
底曳網	0 (1)	5 (0)	0 (0)	9 (7)	14 (7)	22 (6)
まさ網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (3)	2 (14)	5 (16)
船曳網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (6)
敷網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (4)	0 (4)
径 尺 1分=0.379cm						
漁網の種類	径 尺 1分=0.379cm					
	0.5cm以下	0.5~0.6cm以下	0.6~0.7cm以下	0.7~1.1cm以下	1.1~1.6cm以下	1.6cmより大
土鍾の孔径	0.5cm以下	0.5~0.6cm以下	0.6~0.7cm以下	0.7~1.1cm以下	1.1~1.6cm以下	1.6cmより大
沈子網の径	0.4cm以下	0.4~0.48cm以下	0.48~0.56cm以下	0.56~0.88cm以下	0.88~1.28cm以下	1.28cmより大
刺網	305 (19)	49 (4)	24 (11)	43 (15)	5 (19)	2 (10)
掩網	0 (12)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
タテキリ網	2 (2)	4 (1)	4 (0)	1 (1)	1 (3)	2 (1)
地曳網	0 (3)	0 (0)	2 (0)	1 (4)	9 (17)	40 (52)
垣網	0 (0)	0 (0)	1 (2)	0 (1)	0 (0)	0 (3)
網ウケ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)
底曳網	0 (1)	1 (0)	4 (0)	4 (4)	15 (7)	26 (9)
まさ網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	1 (6)	6 (25)
船曳網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (6)
敷網	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (7)

錘の形態は弥生時代から現代まで大きな変化がないとされるので、大きく的外れなものではないだろう。

この指標に基づき上記の各パターンについてみると、主に①・②は「刺網」に、③・④は「地曳網」「底曳網」に用いられる傾向があるようだ。ただし、②は例外的に重く「地曳網」「底曳網」に用いられた可能性も考慮される。

以上のことから、中世の西宮町で少なくとも3種類の網漁が行われていたと推測することができる。

おわりに

今回は、近年の発掘調査で出土した「土錘」という一見地味な遺物から、中世の西宮町における網漁に大きく3種類あることを推定した。既往の調査では、溝を有するC類の土錘やイダゴ壺が出土しており、西宮神社周辺で多様な漁労活動が行われていたことがうかがえる。また、本遺跡では中世の貝殻を廃棄した穴（土坑）も検出されている。そうした土錘以外の漁業に関する考古資料のほか、中・近世の文献史料と合わせて検討することで、かつての西宮町で行われていた漁労活動の実態が明らかになることだろう。

なお、本稿の「土錘」の情報は、発掘調査報告書作成に向けた整理作業中のものであり、報告書において帰属する時期や法量等が変更となる場合がある。

主要参考文献

- 合田茂伸2009「2 考古学的発掘調査からみた近世以前の西宮町」『よみがえる江戸時代の西宮—西宮町のすがた—』西宮市立郷土資料館第25回特別展示図録
- 合田茂伸2017「西宮神社社頭遺跡について」『西宮市立郷土資料館学芸員論集』西宮市立郷土資料館学芸員論集刊行会
- 西宮市役所1959『西宮市史』第1巻
- 真鍋篤行2014「遺物による網漁具の復元」『季刊考古学』第128号、雄山閣
- 安岡早穂2018「土錘からみた瀬戸内海周辺における網漁の選択性（予察）」『大阪歴史博物館研究紀要』第16号

寄贈資料一覧（令和元年6月現在、敬称略）

曲物溜塗七宝つなぎ紋様火鉢1点・溜塗無地丸火鉢（近藤淑子）／若林泰氏文書
20点（若林陽子）
ご寄贈ありがとうございました。

目次

CONTENTS

特別展示「すなどりの具～西宮の漁具～」（西尾嘉美）…1

発掘された「すなどりの具」—西宮神社社頭遺跡出土の土錘について—（瀬尾晶太）…6

寄贈資料一覧…8

西宮市立郷土資料館ニュース第50号 令和元年（2019年）7月20日